

bethel hospice letter spring

ホスピスだより

tender loving care vol.9



松山ベテル病院 ホスピス病棟
〒790-0833

松山市祝谷6丁目1229番地

TEL 089(925)5000

FAX 089(925)5599

ホームページ <http://www.bethel.or.jp/>



医療法人 聖愛会
松山ベテル病院

ベテルに届いたメッセージ①

ホスピスでの夫を偲んで



往見 清子 さん



病室から見える桜の開花を楽しみにしていた夫が、花を見ることなく逝ってから、もうじき2年が来ます。入院の日、問診で「穏やかに死にたいから写経をしたい。」と夫は言いました。この6年間の闘病生活で外科的療法、内科的化学療法を既にし終え、余命を告げられて来たここベテル病院が、最後の病院となるなら我が儘も許してもらって夫の意に添い、夫らしい人生の終末期を過ごせたらと願いました。

季節の移ろいと共に、晩秋の紅葉、色づいた蜜柑山、クリスマスツリー、お雛様などホールまでベットごと移動して見せて頂いて気分転換をしました。クリスマスにチャペルで先生方の賛美歌を聞いている途中、ベット上で止め処なく涙を流した夫の胸に去来したのは何だったのでしょうか。両親の死にも涙しなかった夫、結婚して40年の間、私が2度目で最後に見た夫の涙でした。

1人で見るのは淋しいと相撲番組を看護師さんと一緒に見て頂いたり、好みの看護師さんとのスキンシップ?もあったりして…。休日返上で心の看護をして下さる担当看護師さんには鼻糞（医学用語で何と言いますか?と先生にお尋ねしたら、鼻ウンチかな…と、この答に声にならぬ声を出して笑った夫）まで取って頂きました。

心待ちにしていたのは入浴日です。「ベテル温泉へ行ってらっしゃい。」と送り出す私に「別府も草津も箱根も良かったなあ。」と呟きました。傍らで聞いた介護士さんは入浴剤を準備して下さり、今まで行って楽しんできた日本各地の温泉めぐりを、ベテルでもしたのでした。ある日、入浴後「喉が渴いた。メキシコで飲んだサボテンジュースが飲みたいな。」と。別の介護士さんが「松山では見たことがない。」と沖縄で医療の道を学んでいる息子さんに話すと「パッションフルーツジュースがサボテンに似ているらしいから送ろうか。」と言われたとのこと。職場を離れても身内の様に親身に案じて頂きました。

脊髄転移で全く動けない夫の楽しみの一つは音楽です。全13巻の浪曲のCDを好みました。若い看護師さんには馴染みがないにも関わらず、内容を精通される程取り替えて下さいました。正に温泉療法と音楽療法です。

先生を始め、全ての方々が夫に寄り添って下さり、優しさや暖かさの医療を受けながら、半年間のベテルでの生活を終え、夫の意のままに穏やかに眠るように逝き、風となったのでした。

ベテルに届いたメッセージ②

『 想 ふ こ と 』



石水 哲子 さん



松山ベテル病院ホスピス病棟で入院療養中であつた夫とその介護にあつていた私は、病棟のスタッフの皆さんの祝福をいただいて67歳と66歳の時を刻む事が出来ました。終の棲家と考えてお世話になったこの場所で迎えた誕生日、そして、その日スタッフの皆さん方の心のこもった祝福のセレモニー、決して忘れる事の出来ない楽しい思い出です。

病気もなく元気に暮らしている人も病を抱えて生活している人も誰もが、誰かの助けなしでは生きてゆくことは難しいものです。人々は皆誰かに支えられて生きているのだと思います。夫が病に侵され平凡な日常の生活が失われ、つらく苦しい思いをたくさんいたしました、幸せとは何かを色々考えさせられました、そして、多くの事に気付かされました。自分は誰かの役に立っているのかな、助けになっているのかな、支えになって上げているのかな、わからない事ばかりでした。

私たち夫婦にご縁があつたのでしょうか、それとも運命と定められていたのでしょうか、松山ベテル病院で療養させていただいた日々、心豊かに過ごさせていただいた日々は、今こうして残された私たちの生き方をとても幸せなものに導いてくれています。楽しかった日の記念品や思い出が、悲しみから救ってくれています。松山の地から遠く離れたところで生活していた私たちに、残された命の日々を故郷（ふるさと）で過ごすことを後押ししてくれた多くの人たちの心に支えられ、松山ベテル病院ホスピス病棟で過ごす機会をいただけた事を、いつもいつも感謝しています。

あなたのいる世界はどうなっているの、後で行く私は何の役目を果たせばいいのと、亡き夫に語りかけても何の返事もありません。しかし、いつも変わることなく私たち家族を支えてくれる事を実感しています。

人はみんな神様からお預かりしている命をお返しする日が平等に必ずやってきます。そして、その日が来るまで精一杯生きる事が私の道と思い、日々感謝の中で毎日を送っております。

ベテルに届いたメッセージ③

生きるということ、死ぬということ



加藤 敬一 さん



2008年7月、88才の母をベテル病院で亡くしました。このホスピス便りに原稿を依頼され、何かを書かねばならない責務を感じていました。母が認知症になり、グループホーム「アンジュールともの家」のお世話になるまで、「介護」という問題は他人事のようにでした。ともの家で、理事長、ホーム長を筆頭とする多くの方々の献身的な介護を眼のあたりにして、強い感銘を覚えました。

母が「ともの家」に入居中、母の子宮癌の発覚。一時帰宅した自宅での転倒による大腿部骨折、そしてベテル病院への入院でした。病院の現場で見たものは「ともの家」よりもさらに深刻な死の淵に立つ人々への、職員の献身的な医療と介護の現実でした。

ベテル病院では本当に、誠意のケアを頂きました。こんな看護は初めての経験でした。佐々木先生の心のこもった診察、森先生始め、多くの方々の暖かいお言葉、大森さんを始めとする、皆様方の手厚い看護、もろもろが深く私の胸に響きました。大森さんに、4階のロビーで、母のケアについての私の心の悩みをお話した時、ただただ黙ってうなずいて聞いていただきました。あの時、私の心は随分軽くなりました。母の遺体が、病院を去るとき、皆さんが玄関で見送って下さいました。私は思わず皆さんの手をにぎりしめてしまいました。そんな感動を、皆様からいただきました。

結局、この終末医療を通じて、私は、「生きる意味」の根源的なものを学んだような気がしました。①みんな一律に最後は灰になるということ。②亡くなる時は手ぶらであるということ。③故人のことは、本当に接した人の心にしか残らないということ。④医療・介護、特に“終末医療”は、患者、家族、さらには医療する側にも「生きる意味」を問いかける行為だということ。すなわち、ベテル病院は生きる意味の問いかけの場であり、その問題に答えて行く場であるということ。⑤生と死は表裏一体のものであるということ。⑥そして、私自身の最後に残った課題は、「生きる意味の問いかけは何故生まれるのか？」という根幹の問題でした。

私は大学でここ十数年間、“癌細胞ミサイル攻撃人工細胞”の研究・開発に、全力を傾けて来ましたが、この3月末で定年退職致します。介護に携わる能力も資質も持ち合わせていない自身にとっては、この研究開発の実用化への今後の努力が、お世話になった方々への、そして“生きる意味の問いかけ者”への一つの答えであると信じています。



散髪

いつも穏やかな顔の
往見さん。散髪をして
男前になりました！！

かつこいい〜

これは往見さんの旅立ちから10日前の出来事・・・。
同じ時をベテルホスピスで過ごしていた往見さんと石水さん。
理容師をしていた石水さんが往見さんの髪を素敵にカット。
心温まる、ほのぼのとした1枚ですね。



召天者追悼記念会

2009年10月16日



喜びも悲しみもありました。
思い出を語り合い、懐かしみ、
穏やかな”今”があります。

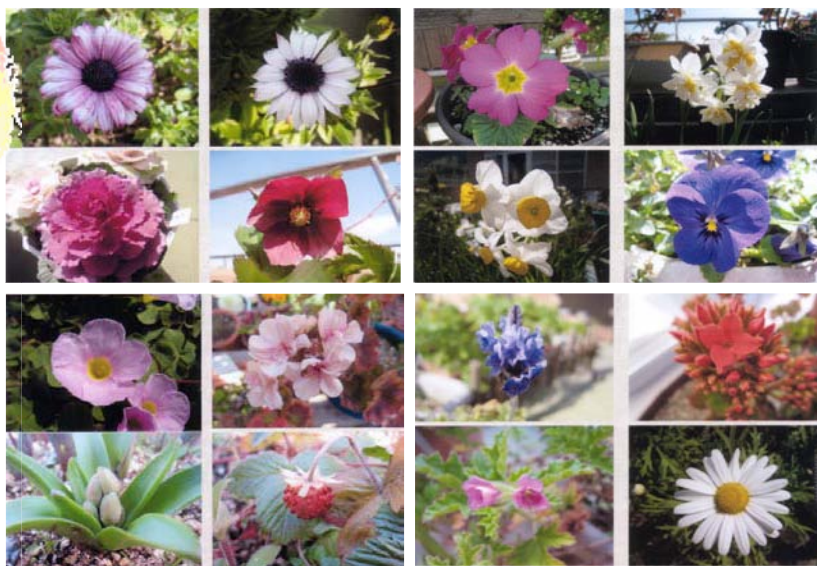


ボランティア募集しています！！



病室へのティーサービスにご奉仕くださる方、病棟のお花やベランダの園芸のお世話をしてくださる方、チャペルでのレクレーションにご協力くださる方等々。
 ※「聖愛会ボランティア説明会」（無料）の受講が必要です。心身ともに健康な成人で、定期的・継続的に活動いただける方の問い合わせをお待ちしております。

TEL：(089) 925-5000 FAX：(089) 925-5599 E-mail：volunteer@bethel.or.jp
 ボランティア委員会（担当：村井・河上）



ホスピス献金をお願いします！！

ホスピス献金は、ホスピス病棟や難病病棟の援助等、(医)聖愛会の諸活動の援助の為に(医)聖愛会に寄付として頂いております。皆様方の暖かいご支援をお願い申し上げます。

★ 現金送金 ★

〒790-0833 松山市祝谷6丁目1229番地
 松山ベテル後援会（松山ベテル病院内）

★ 郵便振替口座 ★

口座番号：01610-2-25364 名義：松山ベテル後援会

※「ホスピス献金」として献げる旨と「金額」をご記入ください。

編集後記； 今回のホスピスだよりは、ホスピスで愛する人を看取られたご家族からのメッセージをお届けしました。3人のご家族の皆様には、原稿・写真の掲載にあたり快くご協力頂きありがとうございました。ホスピスでの出逢いから今もこうしてつながりがある事にうれしさを感じます。これからも皆様にベテルホスピスの温かい雰囲気をご伝えるように努力していきたく思います。

編集委員会：西久保、川久保、西原、白井